

## 報告

## 2020年、渋谷。超福祉の日常を体験しよう展

株式会社今仙技術研究所 今井 大樹

## 1. はじめに

2015年11月10～16日。多くの若者が行き交う街、渋谷。多様な文化や価値を発信し、変化し続ける街だ。そんな渋谷のシンボルタワー、地上34階建ての商業ビル「渋谷ヒカリエ」で、「第2回 2020年、渋谷。超福祉の日常を体験しよう展」（以下、超福祉展）は開催された。

## 2. 「超福祉展」の概要

「バリアフリー」が叫ばれて久しい昨今。この国では「物理的なバリア」の大規模な解消が進んできた。一方で、今求められているのは「健常者」と「障害者」が分け隔てられていることによって生まれる「心のバリア」を取り除くことではないか。イベントの主催、須藤シンジ氏（NPO法人ピープルデザイン研究所）が掲げるメッセージである。

「超福祉展」には、デザイン性のある最先端の福祉機器が展示され、最新テクノロジーを応用した「超人スポーツ」や次世代型モビリティの体験会、40名を超えるプレゼンターが日替わりで登壇するシンポジウムといった機会が用意された。

全てに共通するのは、「かわいそうな障害者のため」という「スティグマ」が介在しないこと。健常者も「かっこいい」或いは「かわいい」と思わず手に取り、「自分が使いたい」とさえ思えるような福祉機器、障害の有無に関わらず楽しむことができる新たなスポーツ、職種業種の異なるプレゼンターがそれぞれの観点から楽しく面白く「超福祉」を語るシンポジウム。いずれも従来の「福祉」の枠に収まらず超越する、「超福祉」である。

## 3. 会場の様子—「超福祉の日常」とは—

7日間を通して昨年度の1万3千人を遥かに上回る3万2千人以上の来場があった。会場は熱気に包まれ、新たな福祉の可能性に「障害者」も「健常者」も分け隔てなくみな目を輝かせていた。

場所柄、着飾った若いカップルがデート中に立ち寄っていく姿も。須藤氏の狙いであろう。カップルの男性が3Dプリンターで作られた電動義手（exiii社のHACKberry）を見て「かっこいい、何これ?」と言いながら近付く。それが義手であるという説明を受けると「自分が義手になってもこういう物があるなら使いたい!」と興奮気味に話した。exiiiのブースでは実際の義手ユーザーもモデルとして参加し、電動義手の「握手会」が行われた。握手をした瞬間、誰もが笑顔になる。そこには「かわいそう」という「心のバリア」はなく、子供達の目には映画に登場するヒーローのようにさえ映ったであろう。

上記の出来事は一例に過ぎない。期間中、会場のいたるところで同じような光景が見受けられた。通り掛かりの人が少なくなく、その多くが「何をやっているのだろう?」と立ち寄っていく。一目見ただけでは「福祉機器」の展示会だと分からないのだ。従来の「福祉」という文脈では「自分達とは関係がない」と顔を背けてしまう人も、そのイメージを覆す斬新なアプローチに「これ、うちのおばあちゃんにいいかも知れない!」と楽しく話も弾む。まだまだニーズは潜在している。

街中でも同じ光景が見られるようになって欲しい。「超福祉」は従来の「健常者」と「障害者」という概念の垣根を超えて、互いへの関心、理解につながるブレイクスルーとなり得る。

2020年、渋谷。東京オリ・パライヤーであるこの年。他の都市に先駆けて、渋谷ではこのような「超福祉」が日常になっているのかも知れない。

株式会社今仙技術研究所

〒509-0109 岐阜県各務原市テクノプラザ3-1-8